The proof is in the pudding!

人文科学研究科長　久　保　善　宏

表題の文は、英語の諺“The proof of the pudding is in the eating.”の短縮版で、「プディングの味を確かめるには食べてみることだ。」という意味です。日本語のことわざの『論より証拠』に当たります。ではなぜそうなるのでしょうか？また、『論より証拠』が常に成り立つのでしょうか？

“The proof of the pudding is in the eating”という諺は Oxford Dictionary of Quotations によると、14世紀に使用されるようになり、その短縮版の“The proof is in the pudding”は、AHD によると、1950年代からアメリカで使用されるようになりました。短縮版の文の意味は、文字通りは「証拠はプディングの中にある」ということですが、オリジナルの『論より証拠』の意味は保持されています。そこでオリジナルの文を考えてみましょう。プディング（pudding）という食べ物は、中世の時代には、腸詰めのことを指していました。豚、羊、などの腸にひき肉、脂身、オートミール、香辛料を詰めて、茹でて作られる料理でした。従って、外側の皮からは材料で使われている肉がどの動物のものなのか、また中味に何が入っているかはわかりません。そこで、「プディングの中に何があるかは食べてみないとわからない」、という諺になったのです。

このように食べ物が外見からは材料がわからない場合は、確かに『論より証拠』で食べてみればいいのですが、『論より証拠』ではなく『証拠より論』の方が大切になってくる場合があります。

たとえば、2016年１月20日に、カリフォルニア工科大学の研究チームが、太陽系に新たな惑星が存在する可能性があることを発表しました。実際に観測されれば、太陽系の『第９惑星』の存在が明らかになります。この『第９惑星』の存在は、数理モデルとコンピュータシミュレーションにより導き出されました。すなわち『証拠』であるデータの『第９惑星』は、『論』により導かれたのです。太陽系の外縁部にあるカイパーベルトと呼ばれる領域にある六つの天体が太陽の周りを回る軌道とスピードに着目して計算してみると、大きな質量をもつ天体の影響を受けていることが判明し、その天体が『第９惑星』の存在を導き出したのです。

この場合、『第９惑星』の存在という『証拠』を単に提示しても、説得力はありません。その理論上の裏付け、すなわち『論』が必要なのです。従って、科学の世界では『証拠』よりは『論』なのです。もちろん、この惑星の存在が証明されれば、この『論』の妥当性が保証されます。

人文科学研究科における研究分野にも『証拠』より『論』が優先される場合があります。人文科学研究科で学ぶ大学院生のみなさんもしっかりした『論』で研究を進めていくことを願います。

さて、『証拠より論』が成り立つのであれば、表題の諺は、次のように言い換えた方がいいでしょう。

A perfect recipe for the pudding!

